

【レポート】

前回2022年の静岡自治研にて、「シン・玉東町」と題し、市町村役場の週3日閉庁を提言したところ、試行的に週休3日制（役所としての閉庁ではなく職員個別のスタイルだが）を実施する動きが出てきた。人口減少社会において有効なGDPをいかにして産出できるかが、豊かな未来への賭け金とみてレポート・提言を行います。

コンテンツの地産地消について

— 飯・風呂・布団の支援を超えて —

熊本県本部／玉東町職員組合 安田 曜

1. 地方創生とは？

2024年4月にも、人口戦略会議において消滅可能性自治体の更新がなされたが、10年ほど前、もともとの発表があったことを引き金に、東京一極集中を是正し、地方の人口減少に歯止めをかけ、日本全体の活力を上げることを目的とした一連の政策が実施されたものである。地方自治体にとってなじみが深いのは地方創生推進・拠点整備交付金ではないだろうか。

筆者は役場の企画部局に在籍経験があり、県に出向した折にもその交付金に関わった経験から、使途として、移住定住・観光（交流人口の増）に向けた取り組みが多かった実感があるが、本町においても移住者へ住居の提供（宅地開発）、各種インセンティブ（移住補助金・医療費・給食費の無償化）が用意されている。

前回、静岡自治研の際に提出した論文において、定住施策においても、交流（インバウンド）施策においても、（各地で実施されているであろう）住居・温泉・飲食・宿泊施設などの「飯・風呂・布団」に誘われ、頭数がそろえばいいのかと疑問を呈したところで、創造性を伸ばさなければ、付加価値は作れないのではないかという見方を持っている。

2. 創造性を阻むもの

創造性を阻害するものは、おそらく過去・現在・未来において一本の世界線以外にないと思っていることではないだろうか。長らくわが国は不景気に見舞われたが、原因としては一度決まったルールに固執し、その範囲内でのコスト削減のゲームを演じてしまったことではないだろうか。イノベーションが起こらないのはそのことが大きいように思う。

「シュレーディンガーの猫」という思考実験があるが（詳しくは他の読み物等をあたられたい）、世界線には複数の可能性があり、ゲームチェンジは起こっていいはずである。

3. 価値創造への手ごかり

創造性はおそらくもう一つの世界線、違う現実を仮構することから始まるのではないだろうか？

すなわちフィクションである。フィンランドのカウリスマキの映画では、いとも簡単に男女が出会い、捨て犬や主人を亡くした犬は速やかに登場人物が保護し飼いはじめ。この様を見れば、おそらく「現実世界ではこうはいかない」と思うだろうが、映画の中では起こってしまう。しかし、なぜ、現実にはこうはいかないのだろうか？ という疑問に始まり、実現化するにはどうすればよいのだろうかという思考にもつながる。その方が昨今の少子化対策的に、動物愛護的にもいいに決まっている。このことから、

フィクションの世界に触れることを推奨したい。また、昨今では切り抜きや短い動画などが優勢だが、そのようなものよりも、緻密に設計されたコンテンツの方が効能は高い。

4. 労働組合員が見るべき映画

※レポートではなくただの趣味ではないかと思われるかもしれませんがご容赦いただきたい。

(1) ユース部の映画「ヤング・ゼネレーション」

舞台は大学街で、地元の高卒組と大学組の階層に分かれた若者たちの物語。主人公は高卒組の若者で、趣味は自転車ロードレース。本来は絡まないはずの二つのグループが、なぜか自転車レースで対決することになるのがおおよそのあらすじ。原題は「ブレイキング・アウェイ」。自転車レースで、風よけをつくり空気抵抗を減らし楽に走る集団から飛び出して勝利をめざすこと、日常や群れからの「逸脱」を意味する。背伸びをすること、仲間を巻き込んで何かに熱中し「かぶれる」という若者の特権を全面的に肯定したい。

(2) 女性部の映画「ノーマ・レイ」

紡績工場で働く女工「ノーマ・レイ」が全米繊維産業労働組合から派遣されてきたルーベンさんのオルグや支援を受け、労働組合を結成する話。アメリカの労働組合における職域の水平的な強みが理解できる。そのような意味で自治労のありがたみもわかる。「UNION」のプラカードを掲げる場面が素晴らしい。ノーマ役のサリー・フィールドはこの映画でアカデミー賞を獲得。別件でエミー賞を受賞した折のスピーチは「もし母親が世界を統治していたら、最初から忌々しい戦争なんて起きてないわ」。その通り。

(3) 自治研の映画「生きる」

世界のクロサワの作品としては異色に感じる。主人公は公園づくりに尽力した渡辺課長という公務員で、地域づくりにおいても当事者の並々ならぬ意気込みや関係者を巻き込んでいく求心力が実を結ぶ。誕生会からのお通夜という展開の脚本が素晴らしく、お通夜の車座にズームインというカメラワークは秀逸。渡辺課長が亡くなっても物語は続き、公園完成の顛末を死者（幽霊）の視点でカメラは見届けるが、あれは例外的な奇跡だったのか？ という終わり方がはかなくも心を打つ。2022年に英国でカズオ・イシグロ脚本によるリメイク版もあり。

(4) すべての組合員へ「怒りの葡萄」

1930年代の恐慌と資本主義の圧力に押され新天地カリフォルニアをめざすことになったジョード家のロード・ムービー。監督は巨匠ジョン・フォード、原作はジョン・スタインベックとJの自乗で圧が高めなもの、フォードの手腕がうなり、すんなりと引き込まれる。冒頭、小作農は巨大資本の重機にあばら家をなぎ倒される。沖縄であれば銃剣とブルドーザーだが、そこはアメリカ、銃をとって抵抗するが、資本側は一枚上手で、重機の運転手に知り合いを起用し、共食いをさせる。まさに民衆が資本の暴力と手練手管になぎ倒されるという描写が圧倒的。地上げに始まり、以後、資本が徹底的にコミュニティを潰しにかかることが続くが、その最小単位ともいえる家族でさえも分断していく。アメリカは核家族社会のイメージがあるが、家族を解体していくことで、相互扶助や家事生産等を資本主義のゲームに取り込んでいったということだろう。苦難の末、一家は約束の地にたどり着いたが、ジョード家の長男トムは行きがかり上、お尋ね者となってしまい家族の元を去る。出発前にママ・ジョードとの最後の会話を交わし、そこで巨大な資本・権力に対峙する民衆の結束の必要性和人とつながっている実感があれば離れていても心はひとつと熱っぽく比喩的に語るが、ママは「よくわからないわ」と返す。母親は人が結束することの大事さを生得的に理解しているが、息子は経験と理屈で納得しないとわからないと

いう対比が示される。出発の朝、辺りはまだ暗く、影のような大地に溶け込み歩いていくトムと夜明け空のショットが素晴らしく、フォードの映像センスの凄さにうなる。大きなスクリーンで鑑賞したい。

(5) すべての働く人へ「瞳をとじて」

最後はぐっと最近のもので、2024年に日本公開。御年80余歳にして、長編映画4本目となる寡作の巨匠、ビクトル・エリセの最新作であり、おそらく遺言ともいえる作品。映画についての映画であり、友人同士であった「監督」がメンタルの問題により失踪した「役者」を探す物語。向かい合う（face to face）カットと並び立つ（side by side）カットの違いが際立つ。人に直面し強引な要求を受けた際、両者の権力格差・分断から情報処理できないプレッシャー（パワハラ）を感じると精神に不調をきたす。この映画で対話に必要なのは、同じ目線でものを眺めることだと気づかされる。劇中、両者は並んで水平線を眺める。たしかに空と海のあいだのように物事には区別があり、人は身の回りのものの分節化・言語化を通し、記号による意思疎通というデジタルなコミュニケーションを行っている（デジタル・トランスフォーメーション）が、どうしても言葉では伝わらないこともあり、解釈の違いなどから記号はいずれ独り歩きする。意味の所有による「ことば」のもつ既得権益へぶら下がる輩も出てくる。そのようなクリシェやイデオロギーを投げつけあうよりも、境界線を共有することで、言いたいことが分かる。だからこそ、配信をひとりで見ると映画館で他人と席を並べる体験や、対面だけの会話（人事評価面接などでありがち）よりも、起こっている現象や進むべき目標を同じ目線で共有することが大事だというメッセージがある。

(6) 教養としても身につく、研修としての映画体験

いかがでしょうか？ 労働組合関係の研修は多数行われているが、これらの映画を見ることは研修にも劣らない経験となると思います。映画館のない街は多いと思いますが、上映会はできます。

5. 創造の現場、コンテンツの地産地消に参加

※映画を見るだけでは実践レポートにならないことから、役者として以下のコンテンツに参加。

(1) 映画「レイニーブルー」

地元、熊本県玉東町（及び隣の玉名市）で映画がつくられることなどないだろうと思っていたら、いつの間にか2023年に制作が開始されることになった。町としても労せず地域のPRができるというおいしい企画だが、撮影の協力ほか、可能な限りサポートができたと思う。実は玉東町役場は最近建て替えられ、今は新しい庁舎で業務にあたっており、旧庁舎は解体を待つのみだが、おそらく日本一老朽化が進んだ旧庁舎が撮影に使われ、アーカイブとして残ることもよかったと思う。自分も何かサポートをと考えた結果、この際、出演してみようとオーディションを受けたら受かってしまったという経緯。

自分の子どもほどの年齢の女の子とデートするという役をもらいましたが、頗るドギマギしました。相手役の方はれっきとした役者さんなので、かなり助けてもらい、素人丸出しのおじさんを丁寧に指導してくれました。

撮影期間中にスタッフと地元の住民を集めた交流会も開催されたが、その折にある役者さんの言葉が印象に残った。「映画はつくりものであり、隅々までリアリティを求める必要はない、ただ、虚構を通してリアルを表現することをめざしている」という趣旨。人間はそもそも言語空間という半メタバースの中にいる。虚構から新しいリアルを作り出し、現実を超えていくことが創造性だと思う。

また、以前から思っていたが、映画作りはまちづくりに似ているということを実感できた。映画ではカメラ、照明、録音、編集機材等、様々なテクノロジーが掛け合わせられている。映画の肝となる脚本（計画）は非常に重要であり、多様なスタッフが限られた時間の中でスケジュールを合わせ、連動して動き、効率的に業務遂行にあたらなければならない。これはまちづくりに通じる。



映画の方はこの夏には完成する予定で、日本国内に限らず、海外の映画祭にも出品していくとのこと。できれば、しまね自治研のような場で試写ができればよいと個人的に思う。

(2) 動く朗読劇「カウンティング&クラッキング」

2024年の当初に隣町のその隣の荒尾市で行われた黒澤明の映画上映会に行った折、オーディション募集のチラシを受け取ったことから参加。自宅近くにスリランカ料理店があり、店主もたびたび役場を訪れることがあり、スリランカの文化に興味があったことも大きい。朗読劇は簡単だろうと気楽にエントリーしたが、実はリーディング・ドラマで演技も普通にあり、このレポートを執筆している6月の末に上演ということで、稽古のたびにしごかれ、自分の意図を言葉に乗せて相手に届けることについて徹底的に指導を受けている状況。

テーマは社会システムの内在的欠陥 (Inherent Vice) と苦境におけるユニオン (Lone Wolfpack)。簡単なあらすじは内戦に直面したスリランカ人の家族の離散と再会の物語。

この劇に通底しているのはインドの古代思想であり、主に仏教を通して実は日本の文化にも大きく関連、影響があることがわかった。直近のアカデミー賞受賞作の「オッペンハイマー」でもインド古典が言及されており、前述の「怒りの葡萄」においても、ラストの母子の会話の中で「一つになること」が言及されているが、おそらくインド思想がめざす「解脱」の境地に近い。

このプロジェクトは荒尾市文化センターが企画する「WATARIDORIクリエイション・シリーズ」の第1弾として実施され、その企画の要旨は九州各地の演劇人が渡り鳥のように集い、舞台芸術という創造を行うものである。荒尾市にはラムサール条約に登録された干潟があり、海岸に集う渡り鳥と掛けた企画。今後の展開にも注目していきたい。

